

PHOTO REPORT



「自然写真家からのメッセージ」
写真・文 **伊藤健次**



いとけんじ
写真家。1968年生まれ。北海道大学在学中から広く北海道の山を歩き、以後北方圏の自然や文化をテーマに撮影を続ける。主な著書に「日高連峰」「大雪山を歩く」「北海道の山」(山と溪谷社)。「ヒグマが語ってくれたこと」(福音館書店)。「山わたる風」(柏樹舎)。
現在、朝日新聞にて写真コラム「野山の時間」、家庭画報(世界文化社)にて「ドクトラ北海道一星と原野の自然へ」のグラフ連載中。

カールに漂う太古の気配

写真は日高山脈中央部のエサオマントッパベツ岳です。日高山脈は狩勝峠付近から襟裳岬まで延々と山が連なり太平洋へと沈む「北海道の背骨」。最高峰の幌尻岳でも標高2052mと世界の中では決して高くはないけれど、稜線には「カール」が数多くあります。これは数万年前の氷河期に高山を覆った重い氷が、山を削ってできた氷河地形。氷河の引かき傷です。

カールでは夏から秋にヒグマが植物の根やハイマツの実を食べに来たり、ナキウサギの甲高い声が響きます。野生の息遣いや太古からの果てしない時間が折り重なった、静寂な気配が漂っています。

登山道は少なく、沢から沢へ源流を渡り歩くのが普通。そうして山の懷を抜けてカールに行(た)たず(ん)でみると、山頂よりも人知れぬ無数の源流や、それを取り巻く山の広がりこそ大事だと気付かされます。

山奥に延びる道路と、温暖化

日高山脈には沢沿いにかなり奥まで林道が入っています。数十年前に比べ、この道のおかげで登山者は随分楽になりましたが、林道は登山者用の道ではなく、造材がダム造りか、道路造りのための道。清流度調査で毎年トップに挙がる札内川の上には巨大な札内ダムができ、沢は一変。魚の行き来はなくなりしました。先に続く日高横断道路は長い間、巨額をかけ工事した後に中断。「背骨」の最も大事な場所に、コンクリートの山が築かれました。

氷河期にシベリアから来たナキウサギは、気温が上がると寒冷地を求め高山に「登って」生き延びました。温暖化が進めば、これ以上登る高い場所はありません。人間の未来にも重なる不安です。



冷涼な岩場に暮らすナキウサギと中断された日高横断道路